

## パーソナル・スペースの基礎的研究 (I)

鈴木 晶 夫\*

## A Basic Study of Personal Space.

Masao Suzuki\*

The hypothesis that personal space invasion produce arousal was investigated in a laboratory experiment by the way of rating scale. Male and female university students were assigned to standing and moving subject. The standing position of the moving subject was randomly assigned to one of 16 levels of interpersonal distance. At each interpersonal distance both standing and moving subjects evaluated the degree that he or she felt uncomfortable as others (moving subject) physically approached another. Moving subjects approached standing subject from 4 angles (e.g., front, right side, left side, and back). The results of the present study support the find that females maintain closer interpersonal distance than male.

ノンバーバル行動のひとつであるパーソナル・スペース（個人空間）は、人間関係において重要な役割を果たしていると考えられる。このパーソナル・スペースについては、これまでに数多くの研究者が各自の概念で定義をし、研究が行なわれている。

Hall (1966)<sup>1)</sup>の Proxemics は一般によく知られている。人間は四つの距離を対人関係の中で使い分けているという。すなわち、密接距離、個体距離、社会距離、公衆距離である。それぞれに遠近の相を考えている。この中での個体距離がパーソナル・スペースにあたる。

Sommer (1969)<sup>2)</sup>は、「個人空間は、他者が侵入することができない領域であり、個人を取り巻く目に見えない境界線で囲まれた空間である」としている。「侵入される」ことについての実験によって、目に見えない境界線を測定することが可能となった。このような境界は対人関係でのいろいろなやりとりの最適距離を示していると考えられる。

このパーソナル・スペースに侵入すると、その相手に不快感や不安感を引き起こすことになる。そこで、Hayduk (1978)<sup>3)</sup>は、「個人が積極的に自分自身のまわりに維持し、他者が不快を起さずには侵入できない領域である」としている。

Roger & Schalekamp (1976)<sup>4)</sup>は、「パーソナル・スペースは対人スペーシングを規定するために役に立ち、個人を取り巻く、持ち運びのできる球状のなわばりである」と定義している。

パーソナル・スペースの形態について、Hall (1966)<sup>1)</sup>と Roger & Schalekamp (1976)<sup>4)</sup>は球状としているが、3次元的なパーソナル・スペースの調査が行われていないので、これは仮説的段階といえよう。また、Hayduck (1978)<sup>3)</sup>も、パーソナル・スペースを3次元的なものと仮定している。彼は、パーソナル・スペースは円筒形、あるいは、腰より上は円筒形で、腰より下は先細りの円錐形をしていると考えている。

Horowitz (1964)<sup>5)</sup>は、身体緩衝帯という概念を

\* 人間基礎科学科

\* Department of Basic Human Sciences

提唱している。身体周囲の境界は、身体の前면에大きく、後面に小さい形をしており、分裂病患者は、この境界が大きいことを指摘している。

パーソナル・スペースの研究の中で、その測定方法が問題となる。これまで大別して2種類の方法がよく用いられてきた。ひとつは、人形やシルエットなどの代用物を操作して距離を測定する投影的測定方法である (Duke & Nowick, 1972<sup>6)</sup>; Pedersen, 1973<sup>7)</sup>; Kuethe, 1962a<sup>8)</sup>, b<sup>9)</sup>)。もうひとつは、ひとりの被験者がもうひとりの立っている被験者に歩いて近づいていき、不快になる前に

近づいてくる被験者を止めて、その距離を測ったり、椅子の配置や選択の仕方から推測したり、現実場面での空間のとり方を観察したりする直接的な測定方法がある (Barnard & Bell, 1982<sup>10)</sup>;

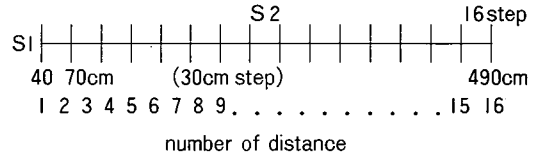


Fig. 1 Standing position that moving subject(S2) was assigned.

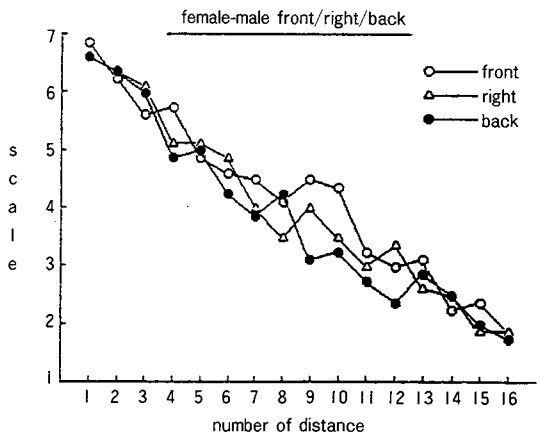
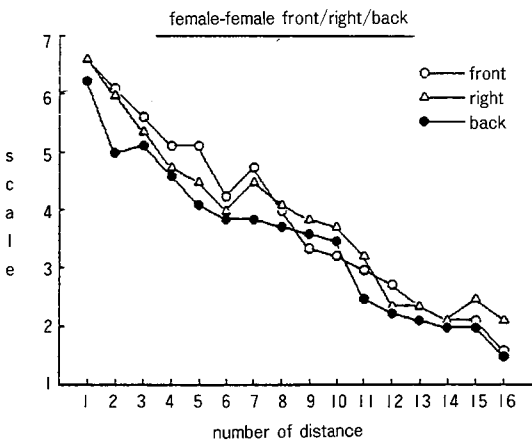
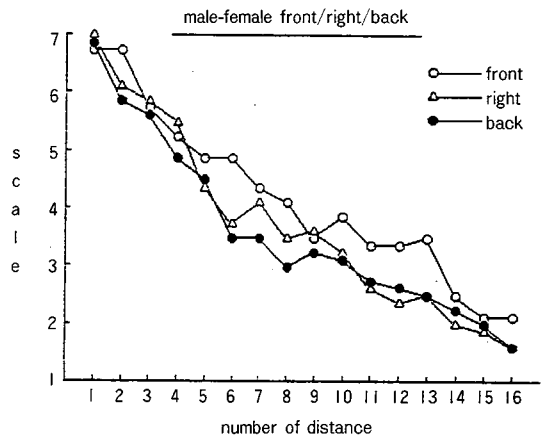
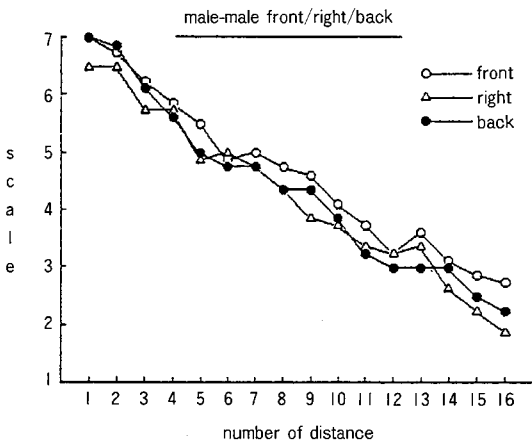


Fig. 2 The degree that standing subject felt uncomfortable in the 1st trial at each interpersonal distance.  
The direction of approach: front, right, back.

Pedersen, 1973<sup>7)</sup>).

以上、パーソナル・スペースの代表的な定義とその測定方法についてみてきたが、ここではこれらをまとめて、「他者の存在により何らかの情緒的反応を引き起こすような身体をとりまく領域」という定義に従い、正面、真後ろ、左右という4方向で、ある距離における気づまりの程度を測定する。また、従来では被験者がもうひとりの被験者に近づいていくという、極限法的な測定方法をとっているが、本研究では、ランダムに立つ位置を変えするという、恒常法的な測定方法によって気づ

まりの程度を測定し、従来の研究と比較検討したい。また、性別による組み合わせでどのような差異があるのか、同じ組み合わせで繰り返し実験を実施した場合に、気づまりと感ずる程度に差異が生じるのか、について基礎的なデータを得るとともに、方法論的な問題点をも検討することを目的とした。

### 方 法

被験者：18歳～22歳の男女大学生各32名（計64名）である。ただし、実験に参加する被験者は、

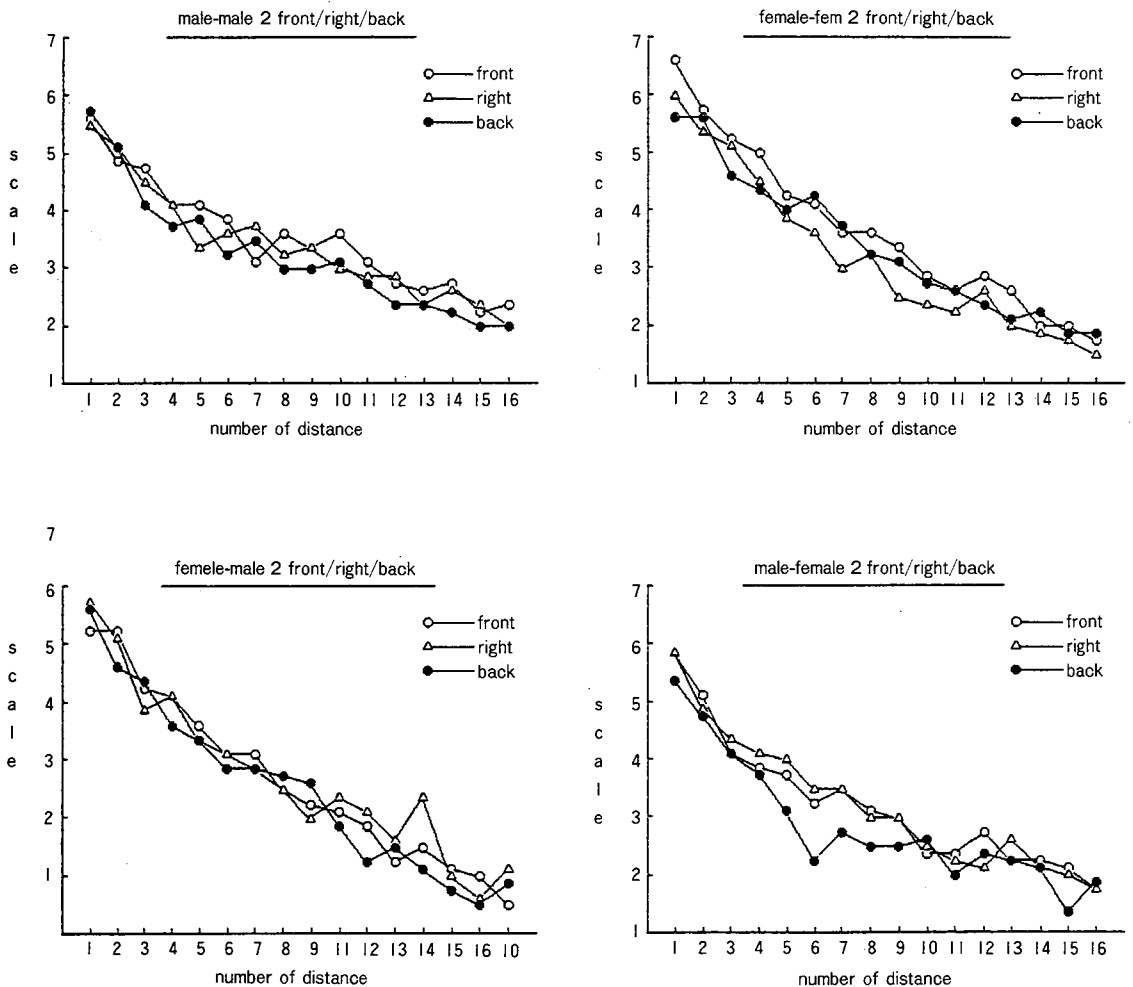


Fig. 3 The degree that standing subject felt uncomfortable in the 2nd trial at each interpersonal distance.  
The direction of approach: front, right, back.

実験室でペアになったときお互い知人でないことを条件とした。

装置及び材料：被験者が立つ位置を示す指示装置、カリフォルニア人格検査(CPI)、印象評定用質問紙(岩下, 1983<sup>11)</sup>を参考に作成)、気づまりの程度を評定する評定用紙。

手続き：被験者を、接近される被験者(S1)と接近する被験者(S2)、同性ペアと異性ペアとの2×2群に分けた。実験では互いに既知ではないペアを選択した。各ペアは、S1とS2とが正面で向い合う、S2がS1の右横90度に立つ、S2がS1の左横90

度に立つ、S2がS1の真後ろに立つの4条件について実施した。各方向の距離は、Fig. 1に示すようにS1から40cmが最短距離で、30cmステップで間隔をとり、全部で16ステップの490cmまで距離をとった。4種類の方向の順序についてはランダムであり、またS2が立つ位置についても指示装置によりランダムに指示した。S1とS2の位置が定まったら実験者の合図によりS1は頭あるいは上半身だけを動かし、S2と視線を合せ、各距離でどの程度気づまりになるかをS1、S2ともに7段階で気分評定をした。

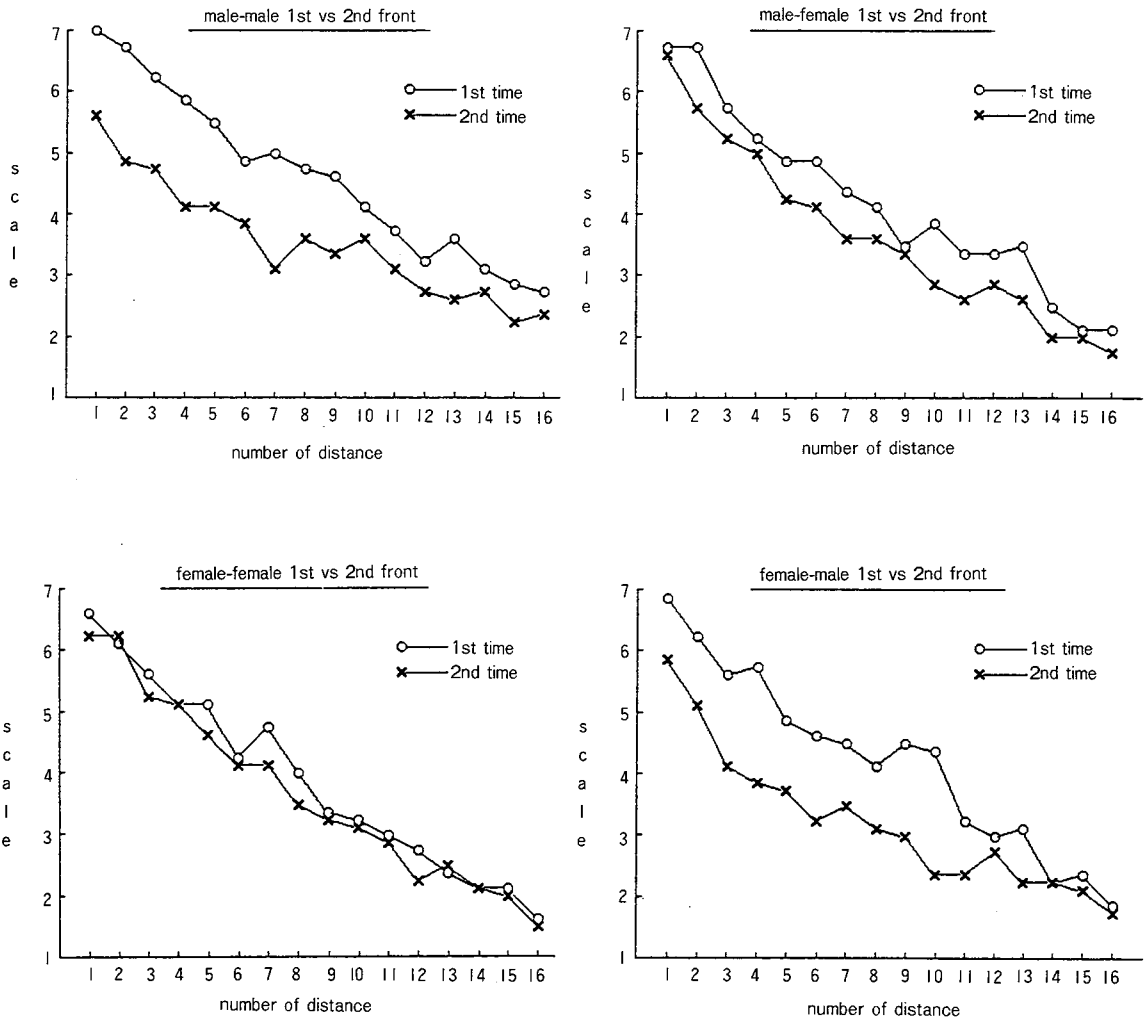


Fig. 4 The degree that standing subject felt uncomfortable in the 1st vs 2nd trial (the direction of approach: front).

結 果

ここでは、気づまりの程度の評定結果について分析する。

パーソナル・スペースの方向については、正面、真後ろ、右横、左横の四方向が考えられるが、視察により左右に差がみられないので、左右については右横についてのみ述べる。

Fig. 2は、男性が男性に近づく、女性が女性に近づくという同性ペアの場合と、男性が女性に近づく、女性が男性に近づくという異性ペアの場合に

ついて、気づまりの程度の平均評定値が図示されている。いずれの場合も、距離と気づまりの程度は、比較的直線的に変化していることがわかる。どの方向でも、被験者が気づまりの程度を評定する前に互いに目を合わせることを条件にしているので、方向によって大きな差はみられなかった。

同性ペアでは、男性同志より女性同志の方が、気づまりにならない傾向がみられる。また、異性ペアでは、近づく被験者が女性の場合の方が男性の場合よりも気づまりにならないと評定していることがわかる。

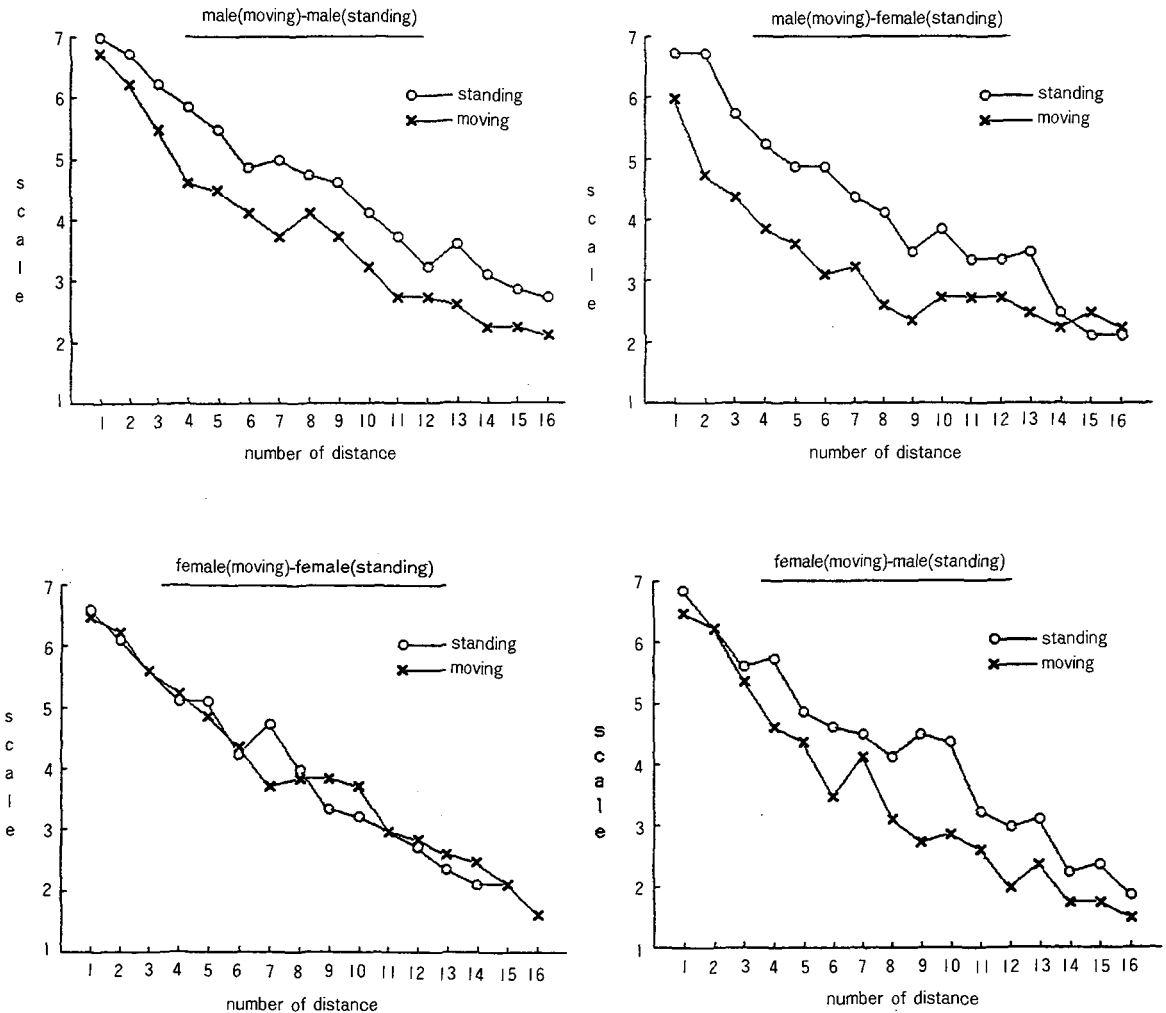


Fig. 5 The degree that standing subject and moving subject felt uncomfortable in the 1st trial. The direction of approach: front.

近づく被験者 S2 と近づかれる被験者 S1 が入れ替わり、再度同じ手続きで気づまりの程度を評定した結果が、Fig. 3 である。2 回目になると、最初の場合と異なり、同性ペアでは男性同志の方が女性同志よりも気づまりにならない傾向がみられる。また、異性ペアでは、S1 が男性の方が気づまりにならない。1 回目と 2 回目を正面についてだけ図示したものが、Fig. 4 であり、上記の傾向が顕著に示されている。

近づく S1 と近づく S2 の気づまりになる程度の平均評定値を正面の場合について示したものが、Fig. 5 である。同性ペアでは、男性同志の場合、近づく S2 の方が気づまりの程度は小さい。女性同志の場合、近づく S2 も近づく S1 も気づまりになる程度に差がみられない。異性ペアの場合、近づく S2 が男女どちらであろうと、近づく方が気づまりになる程度は小さいことがわかる。S2 が男性である場合の方が女性である場合よりも、気づまりの程度は小さい傾向がみられる。

## 考 察

同性ペアの男性が男性に、女性が女性に近づく実験では、男性同志より女性同志の方が気づまり度の評定値が小さい。すなわち、同じ距離をとっても男性より女性の方が気づまりになる程度が少ないということになり、女性の方がパーソナル・スペースが小さいということを示している。従来の研究でも、女性の方がパーソナル・スペースが小さいことを指摘するものが多い (Sommer, 1959<sup>12)</sup>; Mehrabian & Friar, 1969<sup>13)</sup>; Hartnett et al, 1970<sup>14)</sup>; Leibman, 1970<sup>15)</sup>。Leibman (1970)<sup>15)</sup> は、着席行動の研究で、女性は男性より女性により近づく傾向があることを報告している。これらは、一般に考えられる社会規範が、男性—男性の対人距離よりも女性—女性の対人距離に、近づくことを認めていることによるというのも要因のひとつであろう。日本を含めた西洋社会では、女性同志が手をつないでいても違和感を感じないが、男性同志が手をつなぐことは、青年期以降にあまり見られないことからわかる。また、男性は文化的にみて競争的、攻撃的に育てられ、女性は強制的、親和的に育てられているというこ

とも考えられる。

異性ペアでは顕著な差異はみられなかった。Kuethe (1962a<sup>8)</sup>, 1962b<sup>9)</sup> では、異性ペアの“social achemata”は、同性ペアよりもパーソナル・スペースが小さいことが指摘されている。また、Long et al (1967)<sup>10)</sup>でも、同様に異性ペアは同性ペアより接近することが報告されている。しかし、本研究では、互いに知己でないことを条件に被験者を選択していることが顕著な差がみられないことに大きな影響を与えたと考えられる。この親密性が接近に大きな影響を与えることは、Cook (1970)<sup>17)</sup>も指摘しているところである。また、対人魅力が異性間の対人距離を減少させる要因であることも指摘されている (Allgeier & Byrne, 1973<sup>18)</sup>)。

異性ペアで、女性が男性に近づく場合の男性の気づまり度の評定の方が、男性が女性に近づく場合の女性の気づまり度の評定よりも、各方向、各距離ともに大きく、異性間でも女性の方がパーソナル・スペースが小さいことが示された。これらは、女性の方が接近されることによる気づまりの程度が小さいことによるものであるが、McBride et al (1965)<sup>19)</sup>では、異性の接近により GSR (皮膚電気活動) が大きく変化することが示されている。気づまりの評定という心理的側面と精神生理学的側面との比較は興味あるものであるが、本研究とは単純に比較できないものであり、今後の課題である。

各ペアとも近づく S1 と近づく S2 を経験している。始めにどちらを経験したかによって気づまりの評定に違いがみられるかを S1 の評定値について比較すると、男性同志では 1 回目よりも 2 回目の気づまり度の評定値が低下しているのに対し、女性同志では 1 回目と 2 回目に差がみられない。異性ペアでは、女性が近づいてきたときの男性の評定値は、男性が近づいてきたときと同様に気づまり度が 2 回目で減少している。しかし、男性が近づいてきたときの女性の気づまり度の評定値では、1 回目と 2 回目とでは顕著な差はみられなかった。これらは、女性は 1 回目から気づまり評定値が低いので変化が少ないということも考えられるが、女性はパーソナル・スペースが小さく、ま

た、親和性も高いので知己でない対象に対しても抵抗なく接することができると考えた方が自然であろう。今後の問題であるが、親密な被験者同志でのデータとの比較検討によって、より明らかになろう。

また、方向によるパーソナル・スペースの違いについては、その差が認められなかったが、本研究では評定をする前に被験者が互いに視線を合せるように指示したことによるものと考えられる。他の研究では、被験者同志が視線を合わせるという記述はみられないので、手続きの違いによるものであろう。しかし、後ろからの接近の場合、視覚以外の手段によって対象を認知するのでは、各個人や実験状況によって違いがありすぎる。このアイ・コンタクトによる影響についても考えなければならぬ問題である。定義、測定方法の問題など、解決すべき点が指摘される。パーソナル・スペースの測定については各研究者が工夫をして測定しているが、問題は山積みである。

#### 引用文献

- 1) Hall, E.T. The Hidden Dimension. Doubleday. 1966. (日高敏隆・佐藤信行 訳 かくれた次元 みすず書房 1970)
- 2) Sommer, R. Personal space: The behavioral basis of design. Prentice-Hall. 1969 (穠山貞登 訳 人間の空間 鹿島出版会 1972)
- 3) Hyduk, L.A. Personal space: An evaluative and orienting overview. Psychological Bulletin, 85, 117-134. 1978.
- 4) Roger, D.E. & Schalekamp, E.E. Body-buffer zone and violence: A cross-cultural study. The Journal of Social Psychology, 98, 153-158. 1976.
- 5) Horowitz, M.J., Duff, D.F. & Stratton, L.O. Body-buffer zone: Exploration of personal space. Archives of General Psychiatry, 11, 651-656. 1964.
- 6) Duke, M.P. & Nowicki, S. Jr. A new measure and social-learning model for interpersonal distance. Journal of Experimental Research in Personality, 6, 119-132. 1972.
- 7) Pedersen, D.M. Development of a personal space measure. Psychological Reports, 32, 527-535. 1973.
- 8) Kuethe, J.L. Social achemas. Journal of Abnormal and Social Psychology, 64, 31-38. 1962a.
- 9) Kuethe, J.L. Social schemas and the reconstruction of social object displays from memory. Journal of Abnormal and Social Psychology, 65, 71-74. 1962b.
- 10) Barnard, W.A. & Bell, P.A. An unobtsive apparatus for measuring interpersonal distance. Journal of General Psychology, 107, 85-90. 1982.
- 11) 岩下豊彦 SD法によるイメージの測定 川島書店 1983.
- 12) Sommer, R. Studies in personal space. Sociometry, 22, 247-260. 1959.
- 13) Mehrabian, A. & Friar, J.T. Encoding of attitude by a seated communicator via posture and position cues. Journal of Consulting and Clinical Psychology, 33, 330-336. 1969.
- 14) Hartnett, J.J., Bailey, G. & Gibson, F.W. Jr. Personal space as influenced by sex and type of movement. Journal of Psychology, 76, 139-144. 1970.
- 15) Leibman, M. The effects of sex and race norms on personal space. Environment and Behavior, 2, 208-246. 1970.
- 16) Long, B.H., Henderson, E.H. & Ziller, R.C. Self-social correlates of originality in children. Journal of Genetic Psychology, 111, 47-57. 1967.
- 17) Cook, M. Experiments on orientation and proxemics. Human Relations, 23, 61-76. 1970.
- 18) Allgeier, A.R. & Byrne, D. Attraction toward the opposit sex as a determinant of physical proximity. Journal of Social Psychology, 90, 213-219. 1973.
- 19) McBride, G., King, M.G. & James, J.W. Social proximity effects of galvanic skin responses in adult humans. Journal of Psychology, 61, 153-157. 1965.

<付記>

実験は荒井清美嬢の協力によるものであり、心からお礼を申し上げます。